
トマトの胸の中

中川啓太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トマトの胸の中

【コード】

N0747A

【作者名】

中川啓太

【あらすじ】

あなたの一番思い出に残っているプレゼンはなんですか？

うーん。トマト・・・かな。」

意外な返答に彼女はちよつと驚いたようだった。というのも質問が「今までにももらったプレゼントで一番印象に残っているものは何？」というものだったからだ。なぜ、そんな話題になったのかというと、二人が付き合ってから初めて来る僕の誕生日プレゼントを彼女が何にするかまだ決めかねているようで、僕へ直接アンケートを取っているのだ。内緒のプレゼントで驚かせようなんて考えず、本人に直接聞いてしまうストレートな性格を僕は実の所かなり気に入っている。彼女お手製のジャガイモをバターで炒めてからルーの中に入れるカレーを食べながら（これを食べると彼女と付き合っている事を強く意識する。）トマトの思い出についてしゃべり始めた。

トマトをプレゼントされたのは小学校3年生の時で、僕はもうすぐ転校することになっていた。クラスではお別れ会が開かれて、僕はあまり話したこともないようなクラスメイトからも「クラスのみんなのことを忘れないでね」・「転校しても頑張つてね」と、担任の先生が満足するようなフレーズ、実のところ軽薄な常套句でつづられた文集をプレゼントされた。このまったく心に響かないプレゼントも言葉として保存されているというだけで今でも記憶の片隅には残ってしまったているのだから言葉というものは凄い。文集をランドセルに丸めて詰め込み帰ろうとした時に、トマトをくれたのが隣の席のニシノアキだった。

とてもシャイなニシノアキとはあまりしゃべったことがなかった。唯一しゃべる時が、給食にトマトが出た時だった。嫌いなトマトを、「誰か食べたい人いる？」

と同じ班の人に聞いたところ

「私、トマト好き。」

と小声で言ったのがニシノアキで、それ以降毎回食べてもらっていた。そう。僕はトマトが嫌いなのだ。なのに、どうしてプレゼントにトマトを選んだのか理解できなくて

「なんでトマトなの？」

と聞いたけど、黙って、行ってしまった。その時のモヤモヤが今でも忘れられなくて一番忘れられないプレゼントはトマトと答えたのだった。

トマトの話を通りしゃべり終えた後、ニンジンを食べながら彼女はつぶやいた。

「アキさんは君が好きだったんじゃないかな。好きだなんて言えなくて、それでもこのまま忘れられるのは嫌で、子供ながらに必死に考えて、君との唯一のつながりだったトマトをくれ たんだよ。きつと。」

彼女の発想の鋭さに驚き、その当時の記憶をもう一度思い出ししほし逡巡する。

「よく今の話聞いただけで、そこまで分かるね。なんか今のはニシノの胸の中を代弁している みたいなリアルさがあったよ。」

「だってさっきの君の話しぶりってアキさんへの恋心で溢れてたじゃない。アキさんの本当の 気持ちはわからないけど、君の胸の中は良く分かるわよ。だからこう言ったら喜ぶかなと思 っつて。」

「正解かもね。思い出は美化される傾向にあるし。でもそこまで言っっちゃったら、その思いやりも嫉妬にしか聞こえないよ。」

「なんで私が、小学校3年生に嫉妬しなきゃならないのよ。それに思い出で張り合おうなんて 思っつてないわよ。幻想と戦っても勝ち目ないもの。でも、今、浮気したら断固として抗戦するんだか

「5。」

「でも、次の誕生日で一番の思い出のプレゼントの座は追われるだろうね。」

「いや、私はワースト1位を狙うよ。一生忘れられないようなやつを。でもさ、10年以上もプレゼントの事を覚えてるっていうのは、ちょっとうらやましいかな。」

「歴史は必要？」 「なんか深みがでるじゃない。」

「でも僕達には未来があるよ？」 「じゃあきつとコクがでるわね。」

「コーヒーみたいだね。」 「砂糖の量はどれくらいかしら？」

「僕は甘党だからスイートなやつにしたいね。」

「なんかトマトとコーヒーが欲しくならない？」

「私も今、そう思った。でも食べ合わせはかなり悪そう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0747a/>

トマトの胸の中

2010年11月1日10時12分発行